

# 御伽草子の言語の質をめぐって

今 野 真 二

(人文学部人間文化科学)

Shinji KONNO

はじめに

日本語の史的変遷の記述が文献資料に就いて主に行なわれていることは言うまでもない。またその文献資料が本来的に言語分析の為に存在するのではなく、そもそもある具体的かつ特定の目的のために〈文字を媒介として対象化され〉た、〈どのみち多かれ、少なかれ、特殊なもの〉(一九六六年平凡社刊『日本語の歴史 別巻』五二頁)であることも当然のことである。そうした「資料」から一つの学がどのようなことがらを引き出すか、また引き出すべきかについてはここではひとまず措くことにする。しかし現実に観察される具体的な、外在化された言語 (externalized language) を対象とする以上、そこに含まれる様々な特殊性や情報のひろがり、つまり文学的常識などの非言語的知識 (non-linguistic meaning) をも可能な限り含めて言語の歴史として措定するという立場も考えられよう。そしてまた文献資料が前述の意味において〈特殊なもの〉であることを前提とした、つまりその資料をかたちづくっている言語のもつ傾きを考え併せた分析が求められることも言うまでもない。

ところで口語と文語という観点に立って言語について考えた場合、〈口語の流れを研究するにあたっての、その場合の口語は、文語の底流としてとらえられる〉(一九六四年平凡社刊『日本語の歴史 五 近代語の流れ』

四頁)のであり、〈あらゆる時代における文学用語の表現価値は、口語との相対的な距離から生じ、そのかぎり、口語に支へられてゐるといへ〉(亀井孝 一九五〇)(『亀井孝論文集』四 七八頁)よう。文語と口語とは二項対立 (binary opposition) の関係にあるのではなく、相互依存 (interdependence) しているのであり、結局のところ、文語といえども口語に縁取られていると考えることができる。言語史家は残されている文献資料から口語と文語との距離の測定を試みるが、その一方で、ある時代の言語使用者にとつてその両者の距離がどの程度意識されていたのか、ということも前述のような「言語の歴史」においては興味深い課題の一つになる。そうした意識が様々な場に現われることが予想される。例えば鎌倉時代に成立した『徒然草』を室町期写本に基づいて近世初期に刊行する場合、古典文学作品に造詣の深い人物が校訂を施す際にどのような校訂を行なうのか。また同様に鎌倉時代に成立した『平家物語』を室町期に〈兩人あひ対して雑談をなすがごと〉き口語に置き換える場合、テキストにどのような斟酌が加えられるのか。そして中世末期、近世初期に中古(中世)に範を求めて物語を作った場合、それはどのような言語によつて綴られるのか。いずれも興味深い。本稿では第三の場合、すなわち御伽草子がどのような言語で作られているのかについて考察することを目的とする。具体的には二つの接続助詞「つつ」と「て」とを主な分析対象とする。

### 一 御伽草子についての概観

御伽草子をかたちづくる言語の質が、そのままでは均一と見なし難いことは夙に先学が指摘された(註1)とおりであるが、「ねこのさうし」など、若干の作品を別にすれば、御伽草子が〈時代物〉であることは明らかである。とすれば当代語としての口語が顔を覗かせることは当然のことでもあるが、一方原則的には文語の流れを継ぐものであるとの見方も可能であろう。したがって御伽草子を国語史資料として捉えた場合、そこに口語的な要素を求めることは、〈半分だけ書かれた作品〉または〈読んで聞かせる書物〉(一九六四年平凡社刊『日本語の歴史 四 移りゆく古代語』二五五頁)という当該資料の性質を考えた場合に、当然向かうべき一つの重要な方向である。しかし作り物語をつくりあげている言語である文語の側に焦点を移した場合、そこに観察される文語の変質をおして、口語の動きを測ることもできるのではなからうか。御伽草子をそうした、古さ(文語的要素)と新しさ(口語的要素)とを併せ持つ、言語上二面性を有する資料として捉えることができよう。本稿ではその意図された古さと新しさを天草版『平家物語』のありかたを遠景に見据えつつ考えてみたい。

御伽草子を作り物語と捉えた場合、それがいつの時代の言語に範を求めて作られているのかをあらかじめ予測しておく必要がある。ここで、J・ロドリゲスが『日本(大)文典』の「GIVEDEN(外典)の文体について」の条下で、Monogataris(物語)を探り上げ、〈これらの文体の終りは一般にMogueneri(もぐり)Tari(たり)Zoqneru(ぞける)Zoaxi(ぞかし)Fambern(侍る)Saburo(さぶらう)Texi(てし)Tenguern(てんげる)などで結ばれる〉(一八五頁 土井忠生訳『日本大文典』以下同本に従う)と述べていることに注目したい。本稿で具体的な分析対象として採り上げる『横笛滝口草子』においては、室町期写本(清涼寺本・広島大学本・慶應本)、近世初期写本(パリ本)、古活字版(赤木文庫蔵甲本、乙本)、渋

川版、明暦版(註2)と、中世末〜近世にかけての、種々の形態のテキストが揃っており、当該時期の言語の変化を追うには格好の資料である。拙稿(一九九七b)でもふれたが、例えば〈もぐり〉〈ぞける〉といった表現で捉えられている言語事象である係結びに焦点を絞って、『横笛滝口草子』諸テキストをみわたすと、表現性に目を向けた場合、そこにはむしろ『崩壊』にちかい状況が窺われるが、係りと結びとの呼応というかたちに限って言えば、パリ本まではそれを保存していると覚しく、ここから考えれば、御伽草子とは係結びが機能していた時代の言語に範を求めた、つまり古典語規範の作り物語である、とまずは考えられるのである。

『横笛滝口草子』の諸テキストの系譜的関連は松本隆信(一九六三、一九七三)、池田敬子(一九八〇)、橋本直紀(一九八二)、小杉恵子(一九八七)といった諸先学の御研究によつてほぼ明らかにされている。今その詳細を繰り返すことは避けるが、〈広島本・慶應本系統の本文をうけて成立したパリ本から派生したのが古活字本であり、御伽草子本(引用者補: 渋川版のこと)であった〉(小杉恵子 一九八七)との考えに従う。

### 二 室町期までの「つつ」の概観

ツツは〈前後の動作作用の同時に行はる、こと又は反復せらる、こと或は上なる作用の継続せることをあらはせるもの〉(一九〇八年寶文館刊 山田孝雄『日本文法論』七二三頁)、つまり平行、反復、継続の用法を有するが、この中反復は中世期までに衰退したと覚しい。すなわち山口明穂(一九七二)、根来司(一九七六)、安田章(一九七七)で指摘されているごとく、鎌倉末期〜室町初期に成立したと考えられている『手爾葉大概抄』に「簡留程経之心又非ノ二事相并之詠歌不留也中箇々ノ茂其心等矣」とあり、ツツについて「程経之心」(≡継続)、「二事相并」(≡平行)に言及するが、反復については触れていない。他のてにをは秘伝書においてもこれ

は変わらず、『春樹顯秘増抄』(註3)には「つつに口傳ありつ、には程ふるつ、なからのつ、」とてあり」とみえる。こうしたことからは鈴鹿本『今昔物語集』(引用は一九九七年五月京都大学学術資料出版会刊『鈴鹿本今昔物語集―影印と考証―』に拠った)にみえる反覆と覚しきツツ、例えば

ア 其ノ後ハ毎日ニ此扇ヲ取ノ出テ見ツ、涙ヲ流シテ戀ヒ悲テ見テ後ハ

玉ノ箱ノ中ニ納メ置ク(卷九 九オ八ノ九 大系本一九五頁)

イ 然ハ兄ノ等及ヒ多ノ人馬ニ乗リツ、打チ圍テ女子ヲ捕ヘツ(卷九

二四ウ一ノ二 大系本二一六頁)

ウ 其ノ後彼遺言ノ如ク此ノ二人ノ人始ノ皇ノ生タル如ニ持成テ返ル間

ニ可奉キ事有レハ王ノ仰ノ如シテ此ノ二人ノ人ノ人云合セツツ宣下ス

(卷二〇 五ウ九ノ一 大系本二七〇頁)

エ 其ノ糸ヲ結ヒ繼キツ、(而十大)ラノ下シ降スカ極テ細クテ風ニ被

吹レテ飄ヒ下ルヲ妻下ニテ此レヲ見テ(卷二〇 五〇オ七ノ八

大系本三三三頁)

オ 此ノ軀腰ハ二重ナル者ノ杖ニ係カリテ汗ヲ巾ヒツ、卒ノ堵婆ノ許ニ

上リ来テ卒堵婆ヲ逆テ見レハ(卷二〇 五二オ四ノ五 大系本三

三四頁)

の五例がへいずれも流布本において正しく理解されずに、或はテに或はツに誤られる傾向について)の(これら動作が繰り返し行なわれることを示す用法が、古代語的用法に属するために、後世の写し手にとっては既に難解になったことを示すものであろうか)(岩波書店刊日本古典文学大系『今昔物語集』卷二 四〇七ノ四〇八頁)との指摘に連なるものといえよう。(註4)

一方、ロドリゲスは(書きことばに於ける直説法過去及び未来に用ゐられる種々なる助辞について)の条下で(過去の助辞は次の通りである)と述べ、ケリ、ケル、タリ、タル、テシ、テングルなどと共に、ツツを採り

上げて(ツツが動詞状名詞の意を有する時には、少し宛行はれて行く動作の過程を意味する。随つて次のやうに説明される。ミ(見)ツツはミテ、又は、ミナガラ、又は、ミテイテ、ミルニと同意である)(『日本大文典』三九ウ)と述べる。ここには文語(書きことば)ツツ↑↓口語テ・ナガラという対応が窺われる。一方『日葡辞書』にはツツが見出し語として掲出されない。またこれもすでに指摘されているが、天草版『平家物語』にはツツが僅か二例しか見出し得ない。天草版とそれに対応する百二十句本<sup>1)</sup>には次のようにみえる。

いかになる／みのしほひがた、なみだにそではしほりつつ、か／のありわらのなりひらがからころもきつつな／れにしと詠じけん、みかはのくにやつはしにも／なりしかばくもでにものをとあはれなり(天草版二九九頁五ノ六行)

イカニ鳴海ノ塩干方涙ニ袖ハ絞(シホレ)ツツ彼ノ在原ノ何某(ナニカシ)カ唐衣キツツ馴ニシト詠シケン三河国八橋ニモ成シカハ蜘蛛手ニ物ヲト哀也(斯道文庫蔵百二十句本第九四句)

此箇所、天草版は原拠本の文辞に手を加えていないと覚しい。「ここはとつとおもしろいところでござる／ほかに、本々にふしをつけてかた」ところであり、彼「きつつなれにし」の口語訳などはもとよりあり得べくも無いが、そうした原拠本の面影を残した、いわば文語性あるいは韻文性のない箇所のみ「つつ」が残されていることには注目しなければならない。これに続く場面が右馬丞は結局へはあ ふしでもおもしろいが、ところによつてきこえかぬる ただものがたりにめされい」と述べており、山口明穂(一九七二)が指摘するように、それがツツの為とは直ちにはもちろん言えないにしても、右馬丞のごとき若い世代の使用する口語と喜一の語る

〈ふし〉の言語との間に懸隔が生じていたことは予想してもよいだろう。こうしたツツの使用状況は狂言資料にも看取される。

所謂虎明本(一九七六年臨川書店刊『大藏家伝之書 古本能狂言』に拠る)の、脇狂言之類(萬集類の本狂言二二六番中、接続助詞ツツがみられるのは、僅か二六番にすぎず、近接する同語反復(「はなれつ、く」の類)をそのまま含めても三三例のツツがみられるのみである。ただし此中には『万葉集』の和歌(四四六二)や、また狂言の終わり近くに祝言的に述べられる「よろこびにまたよろこびを／かさねつ、」(かくすい・ひつしき聳・くわひちう聳・二人袴)といった固定的表現も含まれている。また三三例のツツのほとんど全てが胡麻点による節付けが行われている箇所つまり謡う箇所のみられることに注目しなければならぬ。前述の和歌などの例を除くと、節以外の箇所のみられるツツは次の一例にすぎない。

それ馬は馬頭観音の化身とし／て仏のときしりの舟くわつし国より漢土まで馬こ／そおひて渡るなれしうのほくわうのはつひの駒楚の／項羽のぼううんすいあんろくさんのくわりうなんどは／何も千里をかくるなり又管仲はたびにたち俄に大／雪ふる里にかへらん道を忘れつ、馬をはなちて其／跡をしるべとしつ、かへりしも馬のとくとぞ聞えける(牛馬)

ここは一般の会話ではなく、〈馬はくらう(博勞)〉が馬の〈子細〉を語るところであり、天草版『平家物語』のツツの使用が思い併せられる。これらから考えると、当期ツツは相当に古色を帯びており、古格を保った韻文性を有する語りなどの中以外では使われなかったのではなからうか。(江口正弘 一九九四)が指摘することく、〈天草版では原拠本の「つつ」という表現はほとんど「て」という形にしている〉ということ、また天草版『伊曾保物語』に「つつ」が一度も使用されていないことなどを考え併せれば、当期の「つつ」はかなりな程度古さを感じさせる文語であったと考えられよう。天草版『平家物語』では、口語訳に際して、この文語

色のつよい「つつ」を必要のある場合は保存したものの、その多くを除くことよって NOTAN 形式をつくりあげたとよえる。

中世期までにツツの平行・反覆・継続の三つの用法の中、反覆が衰えていたことはすでに確認したが、ロドリゲス『日本(大)文典』の記述や、天草版『平家物語』、狂言資料の状況を考え併せれば、残る二つの用法を有しながらもツツそのものの使用が少なくとも口語では衰えていたことが予想される。接続助詞は〈述素相互間の関係を示すものにして、其の職能は句と句とを接合するもの〉(山田孝雄『日本文法論』六〇二頁)(註5)といえようが、この〈関係〉つまり接続助詞で結びつけられる前件と後件との特定の条件が明白でない場合には〈接合〉にそのはたらきの中心が移行することになる。ツツの三用法の中で、いわば最もその条件がはっきりとした反覆を除いた二用法、特に同時(平行) A ツツ B はその同時性をつよくうちだすのでなければ、動詞連用形+動詞連用形、あるいは A テ B といった他の形式によっても代置し得るものであったと考える。〈関係を示〉しながら〈句と句とを接合する〉という接続助詞ツツが前者の負担を軽減したところに、かえって〈特定の条件づけをするものではない〉(一九九〇年補訂版『岩波古語辞典』一五〇四頁) いわば中性的な接続助詞テが勢力を拡大させることになったと考えたい。

### 三 『横笛滝口草子』の「つつ」

ここでは諸本中、室町期写本から慶応本、近世初期写本であるパリ本、そして古活字版甲本の三本を採り上げて考察を行なうことにする。前述のごとく、この三本は慶応本↓パリ本↓古活字版という系譜状の関連をもつ。「つつ」は慶応本に一例、パリ本に七例、古活字版に一二例みられる。前節での「つつ」は文語性がつよいという観察が肯られるとすれば、このことがらをどのように考えるべきか。三本の「つつ」の使用状況の幾つかの

例を次に掲げる。

- 1 a こつをひろいてもとのあんじつ／にかへるにいよ／どうしんをおこしつ、しんじんま／ことなりけり(慶應二二オ七)
- b ゆいこつをひろひもとのあんしつにかへり／いよ／たうしんふかくそとふらひける(バリ下一一オ四)
- c こ／つをはひろいもとのあんしつにかへりいよ／よたうしんおこしつ、なを／とふらひ給ひけり(古二三オ四)
- 2 a これをほたいのたねとして／立出けることさら其夜は心しづかに出たちい／つものしやうぞく引かへてかのしゆく所にてよ／こふへにむかひて今夜はむつまじげなるふぜい／してなごりをしさはかぎりなし(慶應八ウ二)
- b これをほたいのしん／とおもひつ、ことさらその夜は心しづかによこふえにうちむかひ／いつよりもむつまじげなるふせいな／こりおしさはいかばかり(バリ九オ一六)
- c これをほたひの心とおもひつ、／ことさらその夜はしづかによこふえにうちむかひつよりもむつまじげなるふせいに／てなごりおしさはいかばかり(古九オ七)
- 3 b せきあへるなみたの川のはやきせは／あふよりほかのしからみそなき／といふ古哥をそおもひいてられ／けるおはなかもとのほそみちをさかとは／かりのしるへにたとり／行ほとに／さかのみちをはしらすしてきた山／にまよひける(バリ一四オ七)
- c せきあへるなみたの河のはやきせにあふ／より外のしからみそなきといふふるうたを／思いてられつ、こゝろまとはし行程にさ／かの道をはしらすしてきた山にまよひける(古一三ウ一)
- 4 a かへしすか／たをた、一めなにしにまみへたまはぬぞしぐれ／にふる、松たにもかわらぬいろはある物をありし／よのむつごとにもひ
- のなかみづのそこまでもかわら／じとこそちぎりしにはやくもかわる心かな(慶應一五ウ五)
- b かわりしすかた、一めみせ／給へとしくれにぬるれは松たにも又色かは／る事もありひの中水のそこまでも／かはらしとこそちぎりしにはやくも／かわる心かな(バリ下四ウ一)
- c かはりしすかた、一め見せさせ給へとくときつ、しくれにぬれぬまつたにも又いろかはる事もありひの中／水のそこまでもかはらしとこそ思ひしには／やくもかはる心かな(古一七オ三)
- 5 a おほせいだれぬさきによこふえの／ためとてそとは一ほんのこしろにたておきて／ことをばくびにかけかうやさんにのぼりける(慶應二一ウ七)
- b おほ／せなきさきにとてよこふえかため／にあんしつのおしるにたれんをつきそとはをたてゆいこつをくひにかけかう／やさんへそのほりける(バリ下一一ウ三)
- c おほせなきそのさき／によこふえかためにとてかうやさんにのぼり／つ、あんしすましてあたりけり(古二三ウ六)
- 6 a 小松との、御つかひに女院の御所をまいりから／かきほのうちゑいりおもてのらうかにやす／らひて物申さんとうかゝひけるところに(慶應二ウ一)
- b 小松殿の御つかひに女院の御所へまいりつ、／からかきのうちへ入めんらうにやす／らひ物申さんとうか、ひけるところに(バリ一ウ三)
- c こまつとの、御つかひに女院の御しよへまいりつ、からかなのうちへ入めん／らうにやすらひもの申さんとうか、いけるところに(古一ウ八)
- 7 a さてもわうじやうあんにてしはのあみどを／へたて人はそとわれはうちにたへこがれたる／ありさまいまのすがたにとふれは(慶

應二〇才四)

b さてもけさわうしやうゐん／にてしはのあみとをへたてつ、この人はそとわれはうちにてもたへこかれしありさまをいまのすかたにくらふれは(パリ下九ウ二)

c さてもけさわうしやうゐんにて／しはのあみとをへたてつ、このひとはそと我／はうちにてもたへこかれしありさまをいまのすかたにくらふれは(古二一才五)

8 a せうしのひまより／のぞき見れはすそは露そてはなみだ／にうちしほれまこと／たつねかねたるふぜ／いしてしはのあみ戸にたちそいてしお／と／したるありさまいにしへのおもかけにもなおまさりてそおほゆる(慶應一四ウ二)

b しやうしのひまより見れはすそは露／袖はなみたにしほれてまことにたつねわ／ひたるとうち見えてしはのとにたち／そひてしほ／と／したるありさまなりい／にしへのおもかけに猶まさりてそおほえ／ける(パリ下四才四)

c しやうしのひまより見／給へはすそは露袖は涙にしほれつ、誠にたつねわひたるありさまにてしはのとに立そひ／てしつ／と／したるふせいこそいにしへのか／たちには猶まさりてそおほえける(古一六才六)

9 a うき／世の事おくわんずるによろずのいにしへの事／おのみいまさらおもひ出されていとあわれ／ぞまさりける(慶應一〇才三)

b うき世の事をくわんし／つ、いと、あはれそまさりける(パリ一ウ五)

c うき／よの事をかんしつ、いと、哀そまさりける(古一一ウ一)

まず慶応本において一例のみ使用されたツツ(例1a)についてみるが、当該例は前述三用法にも、またテに通じるツツにも当たらないと覚しい。

つまり(どうしん(道心)をおこし)とへしんじんまことなりけり)が直ちに繋がっているのかどうかがまず疑問である。ここには衰退したツツの最期の姿があるのではないか。前述の諸文献での状況を考え併せればこの状況が室町末期のツツとまずは考えるべきであろう。拙稿(一九九七a)で慶応本の表記について報告を試みたが、同本はかなり程度表音的表記をみせる。つまり表記においてかなづかいという伝統の枠に絡め取られておらず、ある意味では当期としての自然な姿を窺わせる。これは表記についての分析であるが、そのことはテキストを構成する言語の質についてもいえるのではないか。つまり慶応本はあまり表現を作っていない、と思われる。(註6)

これ以外の例は幾つかのケースに纏められそうである。まず、慶応本における比較的長い文辞を整理し、場合によっては慶応本では二文に分かれていたものを繋いで一文にする際にこのツツが使用されている例がみられる。例えば2においては、慶應本は(これをばたいのたねとして立出ける)で文が断れているが、パリ本、古活字版は慶応本の表現を圧縮しながら二文を一文にしている。3では慶応本は対応箇所を欠くが、パリ本が(古哥をそおもひいてられける)と、ゾーケルの係結びによって一旦文を終わらせ、次の(おはなかもとのほそみちを)という些か情緒的な表現に続く箇所、古活字版は表現を少し刈り込み、二文を一文に繋ぐ際にこのツツが用いられている。ここではツツは専ら接続の役を果たしているかにも見える。4ではそれがさらに具体的なかたちとして現われている。慶応本では(かへしすかたをた、一めなにしにまみへたまはぬぞ)はやくもかわる心かな)までがすべて横笛のこぼれであるが、パリ本では(一めみせ給)で断り、「と」によって無理な接続を試みている。これを古活字版では(くときつ、)で巧みに展開させていると覚しい。5も同様の例である。aには(へさてち、もりより此事をき、つけて)と、bには(へさるほとにち、母／此事をき、つけ)という一文が続くのであり、挙例箇所で一旦話題が

断れている。したがって〈あんしすましてゐたりけり〉はパリ本での表現と思われるが、この句を接続するためにツツが使用されている。このようなツツは句相互の関係を積極的に示しているとはみえない。専ら接続にその機能があるのではなからうか。連用形、ナガラ、テといった他の接続に比して文語色及び古語色がつよく、それ故当期耳遠く、句の関係を色濃くは示さないツツが巧みに使用されていると思われる。

慶応本において動詞連用形のかたちをとっていたものが古活字版ではツツになっている6・7・8の例にも注目したい。ここには天草版『平家物語』とは逆方向への志向が窺われる。文語色がつよく古語性を帯びていたツツを除くことで口語訳をつくりあげたのが不干フアビアンであれば、そうしたツツをことさら添加することで古活字版は自らが求める時代の言語をつくりあげようとしたと思われる。

また9はロドリゲスが掲げた、動詞十二のかたち〈くわんずるに〉を慶応本がとり、パリ本、古活字版がツツを使用した例である。慶応本のかたちが当該時代の言語としては自然なものではなからうか。

#### 四 『横笛灌口草子』の「て」

前節においては慶應本↓パリ本↓古活字版と成立が下るにしたがつて逆に当期古色を帯びた文語であったと覚しきツツの使用が増加することを指摘した。(註7) ここではさらに接続助詞テについてみる。中期には〈テを連用形に添える言い方が一般的〉(安田章一九七七) になっていることが指摘されており、ロドリゲスもテを付した表現について「動詞の肯定形語根の用法並に時と法を同じうする語根の形で連続する句の用法について」の条下で〈極めて普通であつて盛に用ゐられ、甚だ力強い〉(八四ウ)としている。〈平家物語はすでに近代語の領域に踏み込んでいるが、それでも室町時代末期の天草版でテの添加が多い〉(同前)との指摘がな

されており、口語でのテの勢力拡大が窺われる。『横笛灌口草子』のパリ本と古活字版に対象を絞って両本を並べてみると次のような例が目につく。

- 14 b めのと文たまはり女るんの御しよへそまいるける(パリ四〇一)
- c めのとふみたまはりて女院の御所へそまいるける(古四〇五)
- 15 b さるほとにめのとひそかにたちよりの文とりいたし御返事とてたてまつる(パリ六ウ九)
- c さるほとにめのとひそかにたちよりのかふみとりいたしてたてまつる(古七ウ四)
- 16 b 又風の心ちといひなししひにかよはれけり(パリ七ウ六)
- c 又かせのこ、ちといひなして思ひにかよわれける(古七ウ一〇)
- 17 b 夜もほの／＼とあければなにとなくいてたちかたみに見よとおもひてや(パリ一〇オ三)
- c よもほの／＼とあければな／＼に共なくいてたちてふえをはとりわすれたる／ふせいにてまくらにをきていて(古九ウ一〇)
- 18 b むさんやよこふえ御しよをしのひい／＼て、あこかれゆくほとにいぬ／ゐのかたとさくなれば(パリ一三オ一三)
- c むさんやなよこふえは御所を思ひ／＼給ひあこかれて行ほとにいぬいのかたと聞なれば(古一二ウ三)
- 19 b あたりを見めぐりやすらひたよりもかなと思ひし所にたきくちのこゑとおほしく／＼て(パリ下三ウ三)
- c あたりをめぐりやす／＼らひてたよりかなとおもひし所にたきくちの／＼聲とおほしく／＼(古一五ウ三)
- 20 b なく／＼うちなかめもたへこかれな／＼きゐたり(パリ下五ウ一三)
- c なく／＼うちなかめもたへこかれてなきゐたり(古一八オ九)
- 21 b たきくちこれをき、つけてむねうち／＼さはきもしよこふえなるらん

ととる物も／とりあへず(パリ下九オ二)

c たき口これをき、つけてむねうちさは／きてもしよこ笛なるらんと  
とる物もとりあへず(古二〇ウ二)

これらの例においては、パリ本の連用形が古活字版においては連用形+テによつて受け取られており、後者は相応の新しさを見せる。もちろんパリ本の連用形+テが古活字版に連用形としてひき写される例も若干(四例)見られるが、テが添えられる例がやはり多く、テに関してはツツとは逆に古活字版は時代の言語の様相をかいまみさせる。またこうしたテのとき接続助詞の有無は文の伝達内容に直接関わらない場合が多く、諸テキストの系譜的関連を文献学的手法によつて追求する際にもこれのみを決め手とはし難いが、逆に注目する必要があるとも言える。例えば例二〇bとcとはまさしくテの有無のみが異なるのであり、伝達内容は両者ほぼ等しいと考えられる。前件と後件とを何らかの関係性の下に繋ぐのが接続助詞であるのだから、その関係性が伝達内容に積極的に関与しない場合、接続助詞の置かれていない接合部は前件、後件の間(ま)ともいえ、そこに文体を考える為の情報が出しやすとも考えられよう。またテについては当期へテを連用形に添える言いが一般的になつて、事態の確認、したがつて論理的関係を明示する方向に進んで行く(安田章 一九七七)ことが指摘されている。ある一纏まりの伝達内容へのテの付加は、その「事態の確認」をしているのであり、それは続くことよりも断れることを優先的に提示しているといえ、加えてたたみかけるような情意的な韻律の放棄とも考えられよう。

五 おわりに

二つの接続助詞「つつ」と「て」とは御伽草子『横笛滝口草子』諸テキ

ストの上に全く異なるかたちで現れている。ツツは作り物語として御伽草子『横笛滝口草子』が志向する「古典語」をかたちづくる為に古活字版において積極的に加えられていると覚しいが、その同じ古活字版で「極めて普通であつて盛に用ゐられ、甚だ力強い」連用形+テが増加している。ツツの文語性及びその古色は古活字版成立時と目される中世末期〜近世初期にはおそらくは明らかかなものであつただろう。古活字版と系譜的にきわめて近い関係にある渋川版においても、また明暦四年刊本においても、古活字版におけるツツはほぼ完全に受け継がれている。これは系譜的関連に加え、当期ツツがある彩りをもつ(過去の)語として、いわば「客観的」に捉えられていたからとも考えられよう。(註8)逆に連用形+テは「ごく一般的な接続のかたちであつた故に、それが意識されることもなく古活字版の表面に浮かび上がったものといえる。本稿ではツツとテとを専ら採り上げたが次のような例も目につく。

22 a かるもよこふへとて二人の女あり(慶應一オ二)

b かるもよ／こふえとて二人の女はう侍り(パリ一オ二)

c かる／もよこふえとて二人の女ほう侍りける(古一オ三)

23 a ことさらなげきのわりなきは恋いのみ／ちとこそ申候へ(慶應五ウ九)

b ことさらわりなきはこひの／みちとこそ申候へ(パリ五ウ三)

c ことさらわり／なきはこのこひのみちとこそ申侍る(古六オ八)

すなわち慶應本にはない「侍り」がパリ本あるいは古活字本にみえる例である。平安期に勢力を有していた「侍り」が鎌倉時代以降「候ふ」に替わられたことは周知のことからであり、「侍り」の附加はまさしくツツの使用と並行的な現象といえよう。例二三では慶應本、パリ本で係助詞「こそ」との呼応をみせていた「候へ」を「侍る」に入れ替えた為に係りの結びと

しては破綻を見せたものと覚しい。こうした傾向は相当にちかい本文を有するパリ本と古活字本との間にも顕著に見られる。古活字本にはパリ本にあった「候ふ」を除き、「給ふ」「侍り」に置き換えている例が多く見られる。

叙上のように御伽草子をかたちづくる言語は〈作り物語〉を成立させるために意図されたものと、時代の趨勢に従うものとの二面性を有するものと言え、そうした資料の言語の性質を十分に押さえた上で、しかるべき方法をもって臨めば、御伽草子の言語は古代語から近代語へという過渡的な様相をも示す資料として観察することが可能であろう。またそうした傾向を踏まえて臨むことによつて語史的観点からの分析にも場合によつては耐える資料であることが期待される。ただし言語の史の変遷と、それがどのように意識されていたのかについての見通しもまた同時に求められる。重層的であり興味深い言語資料である御伽草子についてさらにひろい視点から分析を試みたい。

### 註

1 『日本語の歴史 四 移りゆく古代語』(一九六四年 平凡社刊)ではへとにかくも、言語史家にとつて、『御伽草子』はけつして第一等の時代語資料ではない、へ直接にこれを室町時代の言語資料としてとりあげることは、少なくとも文献学的には危険である(二五九頁―二六〇頁)と述べられている。

2 清涼寺本は青木見・内藤悦永「京都・清涼寺蔵『瀧口縁起』」(一九七八年関西大学国文学会『国文学』第五五号)と題して翻刻、また『室町時代物語大成』第一三(一九八五年角川書店刊)にも翻刻される。広島大学本は、竹本宏夫校・解題、徳江元正解説で『伝承文学資料集』第二輯(一九六七年三弥井書店刊)に翻刻があり、慶應義塾大学図書館蔵本は『影印室町物語集成』第一輯(一九七〇年汲古書院刊)が公刊され、また『室町時代物語大成』第一三に翻刻される。パリ国立図書館蔵本は一九八七年刊古典文庫第四九二冊に影印と翻刻が収められ、古活字版甲本・乙本及び明暦版本は一九八三年和泉書院刊橋本直紀編『古版本三種

横笛滝口の草子』に共に影印のかたちで収められる。また古活字版はやはり『室町時代物語大成』第一三に翻刻される。渋川版は一九五八年岩波書店刊日本古典文学大系三八『御伽草子』の底本であり、『御伽草子』(一九七〇年三弥井書店刊)に影印のかたちで収められている。これらの中、慶應本、パリ本、古活字版、渋川版、明暦版は公刊されている影印に基づき、稿者が翻字したものをテキストファイルのかたちでコンピュータに入力して分析に備えた。その際、諸先学の翻刻を充分に参照させていただいたが、稿者の判断によつた箇所も存する。

3 『春樹頭秘抄』にも「第十七つ、の事」として「調箇乍宛都拾充 程をふる心也/事によりて文字かはる也/田子の浦に打いて、見れば白妙のふしの高根に雪はふりつ、思ひつ、ぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさましを」とみえるが、これは〈手爾葉大概抄〉によつて加えている(勉誠社文庫二四『姉小路式・歌道秘蔵録・春樹頭秘抄・春樹頭秘増抄』根来司解説二七一頁)、また『悦目抄』などによる増補(一九八四年明治書院刊『研究資料日本文法第五巻 助辞編(一) 助詞』所収佐藤宣男「助詞研究の歴史」との見解が示されているのでひとまず措いた。

4 ツツは〈奈良時代に極めて多く用いられ〉(一九九〇年刊『岩波古語辞典 補訂版』一五〇三頁)ており、成立は非常に古(一九六九年学燈社刊松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』四六三頁 吉田金彦)いことが指摘されているが、『今昔物語集』成立時にすでにその中心的用法ともいえる反覆用法が衰退していることはこうしたことも関わつていよう。『岩波古語辞典 補訂版』は〈て〉にあたると見られる場合)として「夜のほども出都追来良久(出でつづ来らく) 遍多くなれば吾胸載ち焼く」とし(『万葉集』七五五)を掲げるが、この「出でつづ来らく」は〈還り来ルコト〉(『万葉代匠記』卷二)と解し得、『万葉集』にすでにテあるいは動詞連用形+動詞連用形と重なり合う例が存していることに注目しておく必要がある。また〈ツツ〉による二句の関係構成は助詞テによる場合と等しい(一九六七年三省堂刊『時代別国語大辞典 上代篇』四六九頁)、〈つづ〉による前句と後句との関係構成は「て」に近い(小林芳規『古代の文法II』)という見解も示されている。

5 ただし山田孝雄はツツを〈確述の複語尾「つ」の疊語〉(『日本文法論』七二三頁)とみており、接続助詞に含めない。

6 此箇所のみ、慶應本と古活字版とが共にツツを使用し、「こつ」を共有するな

ど両本の文辞がかなりちがう。前述のごとく、本稿で使用する三本の予想される系譜的関連は、慶應本→パリ本→古活字版であるが、より具体的には(パリ本がこの二本(引用者補:古活字版と渋川版)の直接の祖本である可能性は少なく、(いまのところは、パリ本系統の新たな一本の存在を想定しておくのが妥当であろうか)(小杉恵子 一九八七)との考え方が示されているが、此箇所はそうした考えを支持するものと言えよう。

7 稿者はこのツツの増加は時代語の流れに自然に沿っているのではない、という意味合いにおいて、意図的なものとまずは考えている。片桐洋一(一九七四)は(平安時代の文学作品に異本・異文)が生じた理由として(Ⅰ無意識に生じた本文異同)→(Ⅱ意識的になされた本文異同)を大別し、Ⅱをさらに(Ⅰa創作過程に生じた本文異同 b享受過程に生じた本文異同 c研究過程に生じた本文異同)への三つに分けて考えるべきことを説く。行き届いたこの区分に異を唱えるつもりはないが、言語そのものを分析対象とした場合、(意識の観念が、とりわけ相対的なもの)(F. de Saussure traag, 384)でもあり、ⅠⅡを峻別し難しい場合がむしろ多いことが予想される。したがって言語研究の場合その区別のみ意を尽くす必要はなからうが、しかしそのことがらについて見直しをもつことは逆に必要であろう。

8 『横笛滝口草子』においては室町期古写本内で諸本間の文辞に(ゆれ)が大きい。このことは、(多くのお伽草子)がその本文の浮遊流動性によってまさしく文学的価値を發揮して(一九八八年 三弥井書店刊徳田和夫「お伽草子研究」二頁)いると、文学研究においては積極的に評価されている。これは(書写者が作品の伝来に主体的に参加していた)(片桐洋一 一九八七)ことを示しており、御伽草子は、古典語彙の物語ではあっても、その底流はあくまでも中世末(近世にあると考えておかねばならない。パリ本以下では総体としては諸本間の(ゆれ)が小さく、それは作品及びそれをかたちづくる言語に(距離をおいて対する時代)(片桐洋一 一九八七)に入った為と思われ。

参考文献

池田敬子 一九八〇 「横笛草子」本文の流動(『軍記と語り物』第一六号)  
江口正弘 一九九四 天草版平家物語の語彙と語法(笠間書院刊)

片桐洋一 一九七四

一九八七

平安時代における作品享受と本文(笠間書院刊 橋本不美男「原典をめざして」所収)  
古今和歌集の本文(有精堂出版刊 一冊の講座「古今和歌集」所収)

亀井 孝 一九五〇

古典的文学作品に対する言語感覚の問題(『国語と国文学』第二七卷第四号 後一九八五年吉川弘文館刊「亀井孝論文集」四所収)

小杉恵子 一九八七

今野真二 一九九七 a

古典文庫第四九二冊「よこぶえ・すわりわり」解題  
慶應義塾図書館蔵「横笛物語」の表記をめぐって(かなづかいの枠組みを考える)『早稲田日本語研究』第五号)  
係結び崩壊の状況からみた「横笛滝口草子」諸本の変容(高知大学人文学部人文学科「人文科学研究」第五号)

根来 司 一九五四

中世人と中古語―言語研究への一課題―(『国語学』第一九輯後大幅に改稿して一九七六年笠間書院刊「中世言語の研究」所収)

橋本直紀 一九八二

「横笛滝口の草子」の古版本について―御伽草子本解明に寄せて―(関西大学国文学会「国文学」第五九号)

松本隆信 一九六三

御伽草子本の本文について―小敦盛と横笛草紙―(『斯道文庫論集』第二輯)

一九七三

伝本から見た御伽草子二十三篇について(三省堂刊「長澤先生古稀記念図書論集」所収)

山口秋穂 一九七二

中世文語における「つつ」についての問題―意味認識の過程―(『国文白百合』第三号 後改稿されて一九七六年明治書院刊「中世国語における文語の研究」所収)

安田 章 一九七七

助詞(二)(『岩波講座 日本語7』後一九九六年三省堂刊「国語史の中世」所収)

平成十年(一九九八年) 九月一日受理  
平成十年(一九九八年) 二月二日発行